

平成 21 年度第 1 回札幌文化芸術円卓会議の発言要旨

平成 21 年 8 月 20 日 市民文化課

札幌市文化芸術基本計画（以下、「基本計画」）を策定した今後の文化芸術施策のあり方、円卓会議に期待することなどについて意見交換を行った。

主な意見は以下のとおり。

【文化行政全般】

- この会議で一定の方向性が出た場合の、行政の受け止め方に危惧と期待をしている。（蔵）
- 円卓会議で提案された内容に対し、行政として、できるのか、できないのか、その結論を明確にすべきと考える。（早川）
- 文化芸術行政は各部局バラバラで実施している。全体的な方向性を関係部局でアレンジしていく必要があると思う。今後、市全体として横断的な枠組みを作っていくことが大きなテーマだと思う。（大平）
- 札幌市が進めようとしている文化行政の全体像が見えない。（佐々木）
- アート関連団体や市民の意識調査など、アートやアーティストに関するデータを基に検討したい。（佐々木）
- 「創造都市」と文化芸術等の関連など、さまざまな札幌市の行政計画の関連性が見えるようにしてほしい。（佐々木）
- 行政内部の縦割りのハードルが高く、担当者も 2～3 年で交替してしまう。担当者が替わるたびに同じことを繰り返している。アートセンターやアートマネージャーがつかないで行って欲しい。（中島）
- 縦割り行政は変わっていくのか。また、予算についても知りたい。（早川）
- 例えば、仙台市では行政の縦割りの解消が進められているように思う。先進的な都市に学ぶ必要があるのではないかと。（佐々木）

【今後の札幌市の方向性】

- 「基本計画」の中の4つの施策である「育てる、つなぐ、発信する、活かす」の通りに進めば素晴らしいと思う。(阿部)
- 市民が芸術文化を生活の中に取り込み、必要としているのか疑問である。(新堀)
- 札幌市の進むべき方向性、顔が見えてこない。札幌が文化的な街だと誇れるようにしたいが、そこに至るまでの流れが見えてこない。「札幌をこういう文化芸術の街にして行きましょう。」という方向性を明確にして、各論を積み重ねていく必要があるのではないか。(早川)
- 「札幌から情報を発信する。」としているが、30年前から状況はあまり変化していないように思う。20~30代の若いときに良いものに触れても継続していかない。継続して発信していく、それを見せるシステムが欲しい。(早川)
- 文化芸術に関する基盤整備が徐々に進んできているが、この次のステップが大切だと思っている。(大平)
- 「基本計画」は総花的に思える。札幌独自の札幌バージョン、札幌モデルといったものを如何にしてつくっていくかということが肝要であり、そこを見せていく必要がある。(大平)
- 市民交流複合施設は、文化のシンボルとして造って欲しい。50年先を見据えた舞台機構を用意すべきである。(蔵)
- 施設や病院、学校教育などでは芸術文化を求めており、ボランティアで行くと「どこに相談すると良いのかわからなかった。」という声を聞く。これに対応できるシステムが必要ではないか。芸術文化を求めている施設とアーティストをつなぐ仕組みを改革しなければいけない。(中津)

【人材育成・教育】

- コツコツと若い人たちを育てていって、文化施設をうまく活用する人たちが出れば良い。活動している団体のスタイルに合った発表の場の提供など、建物を建てただけではなく、その中身の部分もつながっていけばよい。(阿部)
- 演劇人(舞台俳優や裏方スタッフなど)の養成など、学校教育としてしっか

りと位置付けされていない分野への配慮が必要である。(阿部)

- アーティストを養成するステップをしっかりと作るべき。ただ単純に発表するための場を提供すれば良いというものではないし、ただ技術を教えれば良いというものでもない。(斎藤)
- 子供たちの、何かを求めるといったような欲求力が落ちているのではないかと感じる。学校教育の中に、何か役に立てることがあるはず。アートマネジメントができる人材の養成も含め、芸術学校を作れないのか。(斎藤)
- 札幌には、もう少し自慢しても良いくらい、文化芸術の資源が沢山ある。行政・市民・企業だけではなく、アーティストをしっかりと位置づけ、プロを育てて行って欲しい。(中津)
- ハコモノ行政と言われるが、これまでの行政の在り方は、文化芸術活動を行うアーティスト自身の存在を無視していた。行政として、そこに人を育てるという意味も含めて力を入れるべきである。モノからコトへ、メディアからコンテンツへ。(新堀)
- アーティスト・パトロン・オーディエンス、全体の底上げが必要。(新堀)

【芸術家の実態・産業との関わり】

- 職業人としてのアーティストをどう育てるか、あるいは、文化を産業としてどうとらえるか、ビジネスとしてどうとらえるかということが緊急の課題である。(蔵)
- 行政は新人の登竜門は用意しているが、中堅アーティストが生活していく仕掛けに配慮していない。札幌は、まだ貧しい環境にある。例えば、音楽家は男性が職業としてやっていける状況にないため、女性が圧倒的に多い。札幌でも男女比が半々程度になるための条件整理を行政がバックアップして欲しい。(蔵)
- 札幌には良い劇団が5～6団体あるが、どこも食べていくのが難しい状況。やる気のある子達は東京に行ってしまう。(斎藤)
- 芸術家の実態を行政はきちんと把握しているのだろうか。実態を知るということも大切であり、根拠となるはずなので、そのデータが欲しい。(中津)
- 行政は、市民のことを前面に押し出しており、アーティストとは何者かが見

えていない状況ではないか。(中津)

- 芸術文化が、産業や経済と結びついてうまく回るように導いていくことができれば、他のどの都市にもないユニークな特徴になる。(大平)

【文化施設・イベントのあり方】

- コンカリーニョや海外の劇場のように、劇場で劇団を持てれば一番よいが、資金の問題がある。札幌の街で劇団を持つことができないのか。(斎藤)
- 「基本計画」には、多彩な文化芸術イベントの開催、今後も新たな文化芸術イベントを実施していくということが記載されているが、単発的なイベントで行くのか、オールシーズン常設で、必ずどんな月に来ても体験できるというイベントを目指すのか、という基本的な議論をすべきである。(中島)
- 既存のイベントの問題がある。PMFは20年間、雪まつりは61年間の歴史の積重ねがある。これを財産として考え、観光客などに見せる仕掛けが必要である。(中島)
- 施設も、オープンしてからのソフト面の蓄積があるはずで、これらを集めて有効に活用することが必要なのではないか。(中島)
- 大きなホールを活用するだけでなく、観客が交流できるような地域コミュニティの中で文化イベントを実施することが有効ではないか。専用ホールと町内会館のようなものをどのように組み合わせ、札幌の文化というものを考えるのか、または、市民も含めて育てていくのかという議論が必要。(中島)
- 市民芸術祭の優秀者を一同に集めて1つの舞台を作り上げる試みを行うなどアーティスト間の連携を構築することも重要。(中島)